

## 展望

# 歌人は何を捨ててきたのか

三沢 左右

「第一歌集には、その歌人の全てが詰まっている」とはよく言われることだ。たしかに、第一歌集と最新歌集を並行して読むと、近作を特徴づける感性が、初期歌集に鮮やかに刻み込まれていることに驚くことは多い。一方で、仮に第一歌集だけを手に取ったときに、その後の歌風の変遷、深化を予見できるかと問われると、言葉に詰まる。第一歌集には、後の作品にはない、多くの挑戦や感性が渾然として存在する。そこに私は、歌人の「あつたかもしれない別の現在」を想像する。

いま私の手元に、二〇二一年に再販された二冊の第一歌集がある。黒瀬珂瀾『黒耀宮』と渡辺松男『寒気氾濫』だ。歌人ふたりの、現在に至る歌風の深化と、そこで失われてきた可能性について考えてみたい。

The world is mine とひくく 呟けばはるけき

空は迫りぬ吾に 黒瀬珂瀾『黒耀宮』

青年が脱ぎたるシャツの背に浮かぶ塩の結晶を味はひてみる

稚魚あまた集めし瓶にホルマリン注げば海

原もベツレヘム『ひかりの針がうたふ』

やねのむかういつちやつたね、と手を振る児よ父に飛行機はまだ見えてゐて

頻出するオタク・サブカルチャー的なモチーフが印象的な『黒耀宮』。春日井建讓りの同性愛・耽美のイメージも鮮烈だ。歌集巻頭の一首目、「The world is mine」の含差を満えた万能感、苦悩と憧れをさららかに表現する。

三、四首目は最新歌集『ひかりの針がうたふ』から。「ホルマリン」「ベツレヘム」といった異化効果を伴うモチーフは健在だが、歌は日常に立脚している印象が強い。とりわけ大きな存在感を放つのは子の歌である。四首目「飛行機」の表記からは、第一歌集の内省的な世界観を転換させ、子を通して世界を一首に結晶させたような印象を受ける。

『黒耀宮』と『ひかりの針がうたふ』を、閉鎖的・虚構／開放的・現実、と対置し、前者を視野の狭い作品と評することもできようが、ことはそう単純ではない。『黒耀宮』の架空の世界で羽ばたいた想像力は、作者の内的な実感に満ちている。しかし、黒瀬はその想像

力を抑制してゆくことで、妻子という他者に深く観入し、詠み上げる歌風を深化させた。

ふくろうのとき月光はおほおと潤いおびて樹海にそそぐ、渡辺松男『寒気氾濫』

八月をふつつと微毒のフリードリヒ・ニーチェひげ濃かりけり

てのひらのむげんのひろさざぐりあひむげんの寂のなかのぬくもり 『雨る』

続いて渡辺松男の作品から。語の修飾関係、接続やリズムの微妙な揺れから生まれる異質な手触りは、第一歌集『寒気氾濫』にすでに現れている。一方で漢語や固有名詞が惹起するイメージの強さで立ち上がる一首目のような歌が意外と多いことにも気づく。

この特徴は後の歌集で次第に失われ、それに代わるように、リズムの揺れや流体的な手触りが前面に押し出される。三首目が収録される最新歌集『雨る』では、多くの語が平仮名にひらかれ、読みの遅速は不安定になる。そこに、詠むべき歌を見つけた作者が、表現を純化させていく過程が伺える。

歌歴を重ねた歌人から学ぶべきは、研ぎ澄まされた表現だけではない。現在の表現に至るまでに、おそらくは痛みを伴いつつ捨てられた表現や創作意識に思いを馳せるのもまた、私たちに深い示唆を与えてくれる。